

看護学生の臨地実習について

看護学科学生の臨床実習適格認定書授与式が9月24日に行われました。これは、3年次後期から長期にわたる看護専門領域の臨地実習を前に、学内で必要な学習単位を修めた学生に授与されるもので、今年は60名の学生が認定されました。臨地実習は、医学部附属病院を中心に高齢者施設や、保健所、訪問看護ステーションなど、看護職が活躍する多様な場で実習を行います。看護の対象は病院で療養を行う人だけでなく、地域に住む健康な人、病気のため在宅療養を行う人、介護・福祉施設で生活する人など、あらゆる健康レベルの人を含み、健康管理や療養上の世話をしますので、臨地実習で看護実践能力を培う学習は不可欠です。授与式で学部長が言われたように、ようやく看護仮免許を得られた状態ですから、教員や臨地実習指導者の助言を受けながら、医療チームの一員として役割を担い成長してくれることを期待しています。



実や高い学習意欲を持つ学生への保健師教育の質の確保を図る必要があります。大学によっては、保健師教育や助産師教育を専攻科や大学院等で重点的に実施するところも出てくると思います。
(藤田君支)

第17回医学・看護学教育ワークショップ

毎年医学部では、教育力向上のための研修会を行なっています。今年は、8月21日に、「研究マインドの涵養について」をテーマに開催されました。始めに、副島先生から、「研究マインドの涵養について - 現状と本学卒業生の動向 - 」と題し、国内外の医学研究の現状と卒業生の基礎医学研究者の現状が紹介されました。独法化以後、全国的に医学研究実績の低下が見られ、世界的にも日本の地位が心配な状況のようです。引き続き、特別講演では、杉岡隆先生(堀川病院)から「臨床研究: その意義と方法論を学んだ経験」と題し、臨床医として臨床研究の方法論を学ばれ、実践された経験をお話し頂きました。また、数間恵子先生(東京大)からは、「研究マインドの涵養 - 看護における臨床研究の実践と教育・指導の経験からの提言」として、東大での看護学研究の現状を、最後に本学の出身で大学院卒業後、現スタンフォード大学研究員である大谷顕史先生から、「米国での幹細胞研究」と題し、米国での研究環境の現状を紹介頂きました。幼児期からのプレゼンテーションの経験も重要のようでした(参加99名)。

午後は、「学部教育、卒後教育における研究マインドの涵養とそのためのシステム」および「大学院、教員における研究能力の向上とそのためのシステム」についてグループワークを行い、その結果を発表し、全体討論を行ないました。大きな大学と比べ、研究設備、資金面では劣るかもしれませんが、研究の面白さや重要さを、学生に十分伝えることが必要であると改めて考えました(参加70名)。

(市場正良)

保健師教育について

社会のニーズに応えうる看護職を養成するため、平成22年4月に保健師助産師看護師法が改正され、保健師及び助産師の修業年限がこれまでの6ヶ月以上から1年以上に延長されることが決まりました。この改正に伴い、これまで本学のような看護系大学では4年間の学士課程で、保健師及び看護師教育は全ての学生が、助産師教育は選択によって履修し、3つの国家試験の受験資格が得られましたが、保健師教育も選択履修が可能になります。国家試験に関しては、看護師の他は保健師あるいは助産師のいずれかの職種のみを受験資格を得ることになります。経過措置が設けられるため在学中の学生には影響しませんが、今後は医療の高度化や看護ニーズの多様化に対応する看護師教育の充



教育広報部会

小田康友、池田豊子、市場正良、吉田和代、
江村正、藤田君支、阿部博美
ご意見をお待ちしています(oday@cc.saga-u.ac.jp)